

價 値 の 體 系 (其二)

文化價值と創造者價值

左右田 喜一郎

四

余は今進むで各種の文化價值并に之が *Das konkrete Universale* たる文化價值一般に對立して考へ得べき他の種の價值のあり得べきやを研覈して、之と文化價值との關係を尋ねて其の相互の價值體系中に於ける位置を決定して見たいと思ふ。

Hegel が *absoluter Geist* として擧げたる藝術、宗教、哲學等の價值が *objektiver Geist* たる法律、國家、政治、道德、人倫、歴史、經濟、技術等の價值に對して其の區別せらるゝ所以の動機を釋ぬるときは、確かに其の間閑却すべからざる深き思索の跡を辿ることを得るであらう。(1) 歴史上の諸事蹟は唯永久に去來の濤の如く、翩翻たる大空の雲の如きものでなく、一民族は一民族に、一代は一代に吾等が何物かに向つての精進である。其處に進歩を語り得、其處にイデオを望み得る。吾等が政治、經濟、技術、學問に於て吾

等に殘されたるものは吾等が有とするに努め、之を後代に傳へて彼等の有とするに努めしむる。その處に歴史の生命があり、其處に人生の悠久がある。進歩は歴史の *Now* である。今吾等が有する文化價値の意義は Hegel が指示したる *objektiver Geist* の凡てに互りて一として皆其の將來——其の實現と完成とを發展の流に托せざるものはなす。

(1) G. Mehlis: a. a. O. S. 304 ff. 472 ff. 522 ff.

歴史は不斷に互りて永劫の精進であり而して努力である。所謂文化は其の努力の記録に過ぎぬ。吾等の前途には星の光燦として輝き吾等は永久に其の榮光に憧れて進む。イデー *Sollen* の目標は吾等の行く手遙かに儼として立ち、吾等は常に現實を思ひ *Sein* に顧みて其の無爲に茫乎たるのみである。歴史は現實と理想、文化は *Sein* と *Sollen* との距離を制服せんとする吾等の哀れむべき若くは慰むべき日記に過ぎぬ。而して決定的に其の距離に打勝たんと欲するは言ふまでもなく人類最終の目的である。

歴史は又一人の業でない。人は人と相扶けて或はアリアン文化の種を播き、ギリシャの花を咲かしめ、文藝復興の果を結ばしむ。歴史は社會的事業である。法律の

功は一人に收むべくもない。政治は一人を其の對象としない。經濟技術の諸制度は皆萬人の趨いた跡の記録に過ぎぬ。人は人と動く、其處に文化があり其處に歴史がある。

今歴史的な文化價值と稱せらるべき Hegel の Objektiver Geist の諸價值を見るに、其の實現に於て皆共に歴史的發展の濤にゆられ、現實理想の距離に憂ひ、人と人との協力に俟たざるべからざる其の本來の内在的條件に制約せらるゝこと最も分明である。之に反して其の *absoluter Geist* として擧げられたる藝術、宗教、哲學に至つては甚しく其の面目を異にして居る。何人かあつてラファエロの後に復たラファエロを思ひ、ベトトヴィエンの後にベトトヴィエンを尋ね、プラトイン、カントの後にプラトイン、カントを稱し、釋迦基督の後に同じき釋迦基督を擧げんとするものがあらう。彼等は彼等自身に於て自足圓滿完了の意味を語るべし。何人かあつて其の中に發展の餘地を思ひ、現實理想の距離を嘆き、他の凡庸と俊秀とを驅つて其の完成を期せしむるものがあらう。彼等は彼等自身の内部に於て既に完了を示し、統一を説き、自立を證するであらう。歴史の浪、發展の流は彼等を濯ぶべくもない。實在、當爲の鬭争は彼等の關せざる所である。蠢々たる人のどよめきは抑もや彼等の目に如何に映ずるであら

う。雲際に屹立したる孤峰の面影や正さに彼等を傳ふるものである。

此の如くして objektiver Geist と absoluter Geist との諸價值の間には確かに相互に區別さるべき深き洞察を吾等に要求せざれば止まぬ。一は發展的他は自足完了的、一は乖離的他は統一的、一は社會的他は個人的である。(2) 一は社會的文化の性質を示し、他は個人的天才の意味を語る。一は社會の內的構造を論理的に傳へ、他は個人の尊嚴と驚異とを全部的意味に於て發揚せんと欲す。社會對個人の深き意味は此の問題の尋究に待たねばならぬ。吾等は吾等の眼を茲に向はしめざるべからず。茲處に問題解釋の鎖鑰は横はる。幾多の價值學說中 Hegel の此の點に關する諒解は、吾等が有する思想發展の歴史に於て比較を絶して尊重に値するものと言はねばならぬ。吾等は此の貴むべき思想を追隨するに於て幾多の重要なる且深刻なる問題に遭遇することを否み能はぬ。Hegelによつて提出せられたる解釋は更に後代吾等の沈思を要求する問題である。余は今此の問題を心に浮ぶるに於てすら限りなき喜悅の情を覺ゆるを禁じ能はぬ。

(2) Mehlis の前掲書に於ける解釋を参照せよ

唯 Hegel が歴史的價值なりとしたるもの、中につき特に吾等の注意を惹くは道

德的、倫理的價值である。眞善美、聖は殆んど凡ての學者に依つて殊に近時の價值哲學論者によつて全く同一の取扱を受くるのみならず、却つて他の論理的并に美的價值に對しても *Sollan* の觀念を援用せしめんとするほど倫理的價值は其の摸範的役目を演じつゝある。此の意義に於て *Hegel* が倫理道德の歴史性を高調して藝術、宗教、哲學と區別したるは頗る異色とすべきものたるを失はぬ。乍併疑ひは亦必然此の點から始まらねばならぬ。

Absoluter Geist の所産が超歴史的であり統一なることは前既に見たる通りであるが、之と全く同じ意味に於て倫理道德を解することは果して不可能であらうか。余は古への所謂「聖賢」に顧みても當に之を疑はんと欲するものである。加之政治、法律、經濟、特殊科學技術其の他各般の *Ideal* が所謂 *objektiver Geist* に屬する價值の全部に互りても、其の價值其自身の論理的意義は云ふまでもなし、更に之を實現する過程として解せられたる各般の社會的文化生活に於ても、其の之を實現する態度及其の所産の内に又能く超歴史的、個人的且統一的自足完了の意義を見出し得べきを信ぜんと欲するものである。吾等はダンテ、ゴッテ、モツァルト、近松又はアウグスティン、エックハルト、日蓮さてはアリストテレス、デューカルト、スピノザ、ヒューム、フキヒテ、シユリン

グを思ふと同じ意義に於て、其々の異なりたる範圍に於てナポレオン、ビスマーク、エ
 スチニアートヌス、コルベイヤ、グロンウエル、ガリレイ、ニュートン、ローレンツ、ダーウキン、ロ
 パチエウスキトを思ひ得ぬか。

余は一定の觀點に引き直ほされたる場合に於て凡ゆる範圍に互りて客觀的歴史
 的文化的價值并に其の實現の過程と解釋さるべき歴史的文化生活が、藝術、宗教、哲學の
 諸價值が個人的超歴史的、統一的、自足完了的と解せらるゝの意義に於て、全く之と同
 じ意味に於て等しく又超歴史的、個人的、統一的、自足完了的と解釋され得ぬとは思は
 ない。吾等は眇たる一經濟生活に従ふもの、一技術生活に従ふものと雖も、尙晩年の
 Kantと共に之に對して人格の尊嚴に對し畏敬の念を胸に秘するを禁じ得ない。凡
 ての事業、凡ての力作は其の人格の發露として個人的、統一的、自足完了的なることを
 思はざるを得ない。此の内的意義が其の表現の寧ろ或意味に於て外縁とも稱さる
 べき文化生活従つて其の係はるべき範圍内の文化價值の種類に異なるに従つて、或は
 統一的に或は乖離的に、或は自足的に或は發展補充的なるべしとは考へ得ない。此
 の意味に於いて objektiver Geist に屬する諸價值と雖も或る觀點よりしては absoluter
 Geist に屬する諸價值と同様の考察を容れ得べきものであると信ずる。此くして始

めて各種の事業、各種の努力は價值實現の過程と解釋せらるゝことに於て皆一樣に人格の尊嚴を語り得るに至るものである。

之と反對に *absoluter Geist* に屬する藝術、宗教、哲學の諸價值と雖も、一朝亦其の立場を變じて *objektiver Geist* に屬する諸價值を觀察したるものと同じくせしむるときは、後者が歴史の上に發展的、現實理想に關して乖離的、其の實現の地位に就きて社會的になると同じく、發展的、乖離的、社會的なりと觀察し得ることも決して不可能ではないと思ふ。現に Hegel に於ても無論歴史的に言ふ發展の意味に解せずとも *Dialektik* を追ふて其の理念開展の跡を辿り、殊に哲學即哲學史、哲學史即哲學の立場を採りて茲に偉大なる思想體系の收結を示したるは必ずしも此の間の消息を語るものに非ずとは言ひ得まい。モツアルトの後にペートイヴェンとワグナーを思ひ、カントの後にフヒテ、シエリング、ヘーゲルを思ふことに必ずしも如何なる立場もあり能はずとは言はれまい。唯々藝術、宗教、哲學に於ては既に悉く其の價值は其の本質に於て實現せられ終りたるが故に、進歩を云爲し得るは此の既に一度實現せられたる本質本領を只體系に組織し之を擴大し之を豊富になすことを得るのみ、其の價值の本領に於て發展的なることを得ずと云ふものもあらう。(3) 又は Herder の如く *Humanität* のイデ

が實現せられたるときには如何なる時代、如何なる處、如何なる國民を問はず其處に文化の目的は充さるべし、何爲れぞ時代より時代を追ふて進むの發展あらん希臘の彫刻、中世の神秘主義、獨逸の理想哲學の如きは即ち奈何と云ふものもあらう。乍併前者に對しては余は答へて曰はう。例之特殊科學として見たるユークリッド幾何學が有する其の本然の内面的價值は非ユークリッド幾何學の現出によつても動搖は來されぬ。其の意味は其の特殊科學の範圍内に於ける妥當性につきて言ふのではない。如何なる學說でも其の完了したる組織體系の内に保有する。其自身の内面的價值につきて云ふのである。而して此の如き價值は新學說の發見によつて毫も動搖さるべきものにあらずといふことを言ひ表はしたい。恰も地動說の現出によつて全く排斥し去られたる其以前の反對の學說が、其の自足完了したる組織體系の中に有したる其の本然の價值は地動說によつても動かさるべきではない。猶ほ復讐が徳川時代に有したる善の意義は、今日の改變せられたる道德觀念によつて寸毫もその内面的意義は左右せられ得ざるが如きである。蓋し當爲の不遍的妥當性なるものも其の根據を茲處に据えつゝあるものである。プラトンのイデア論、佛陀の體験、ミケランジェロ、ベイトーヴェン作品の内面的自立性と雖も、到底此の意味以外にはあ

り得ない。此の點に於て *absoluter Geist* と *objektiver Geist* との間に發展進歩の意味に二の異なるものありと觀ずるは誤まつて居る。若夫ヘルダーの意味に於て進歩發展を否むとの意義に於ては是豈藝術、宗教、哲學のみに限らうや。凡ゆる社會的文化生活の所産及び其の係はるべき範圍の文化價值に於ても亦同様のことが言へるであらう。佛國ナポレオン時代の法典、英國の金融系統、獨逸戰前の行政組織、善き意味に於てか惡しき意味に於てか何れか其々特有の其自身の自足的意味を語らざるものがあらう。此の如く *absoluter Geist* は發展的、乖離的、社會的ならずと言ふと雖も、其の他の *objektiver Geist* に屬する諸價值が發展的、乖離的、社會的なりと言ふの意味に於ては *absoluter Geist* に屬する諸價值も亦然りと主張し得ることは余は決して誤まれりとは思はぬ。

③ G. Meiner, a. a. O., S. 325 ff.

此の如く論じ來れば、*absoluter Geist* に屬する諸絶對價值は個人的、統一的、自足完了的であり *objektiver Geist* に屬する諸客觀價值は社會的、乖離的、發展적であるとして、此の間に截然たる區別の存するものあることを主張するは未だ遽かに然りと斷ずる能はざるものがある。一方前者と雖も後者を社會的、乖離的、發展的と云ふ意義に於

ては亦然りと言はざるべからざる理由あり、他方後者と雖も亦前者を個人的、統一的、自足完了的なりと言ふの意味に於ては同じく亦然りとせざるべからざる根據もある。乍併茲に問題はある。繙つて靜に考ふれば價値を考察するに際し兎も角一は個人的、統一的、自足完了的、他は社會的、乖離的、發展的なりとすることを得る立場のあり得ることは確かなりとすれば、茲に吾等の沈思を要求すべき問題は伏在せざるであらうか。余は此の問題を考へて見たい。

上來の記述によりて明かなる如く果して此の二つの立場が價値其のものゝ種類を分別することを得ずとするならば殘る可能性は價値の種類に關するものでなく、價値を見之を考ふる立場の相違に歸せざるを得まい。即ち價値は其の間に何等の種類分別を施すことなく其のあるが儘に吾等の考察の立場に委ね、唯其の考察の立場に分別すべき所あるを示すものでなくてはならぬ。即ち價値は *absoluter Geist* と *objektiver Geist* とに分たれて各特殊の種類のもの之に屬すとし一方を *Abschluss-, Vollendungs- oder absoluter Wert* と名づけ、他方を *Fortschritts-, Beitrags- oder Anbahnungswert* (*Mehlis*) と名づくる如きは誤まりであつて、此の觀點よりして論ずれば價値の如何なる種類のものゝ雖も凡て皆觀點の相違に従つて此の兩者の何れにも屬すべきものなるこ

とを示すものである。余は前段に於て文化價値の階段説を排したが、今復た文化價値の種別論を斥けたいと思ふ。

五

今茲處に吾等が檢したる價値の見方の二つの立場は恐く更に深き意味を露はすものではあるまいか。余は之を次の如く解せんと欲するものである。

凡そ如何なる種類の文化價値なるを問はず、开が特殊科學、政治、法律、經濟、技術、宗教、藝術、倫理、哲學等の各範圍に於て、其の係はるべき各般の文化價値は凡て皆一様に人類歴史の所産として發展進歩の可能を思ひ、社會萬衆及び歴代協力の結晶として其の完成、其の理想の實現を遠き吾等の未來に托せざるべからざる一面あると同時に、如何なる範圍に於ても、如何なる時代、如何なる民族の中に在つても、一個の天才超人あつて其の解釋を許さるべき方面の價値に係はりて時處を絶し、人を超えて其自身の内面的意義を端的に發揚し、自足圓滿完了的に其の統一調和の相を現顯し得べき他の一面ある事は疑ふべくもない。一は價値の經過を思ひ他は價値の意味を探る。一を課せられたる問題を解釋し之を實現する方面より觀察するものとすれば、他は

端的に價值其自身の意味を語るものである。凡ての價值は即ち此の二面を有す。價值に對する此の一面の解釋を呼ぶに斯學通行の概念「文化價值を以てすべくんば、他の一面の解釋を名づくるに余は「創造者價值」余に造語を許せ——「Schöpferwert」を以てしようと思ふ。蓋し一面は歴史的社會的にして其の目標はカントの意義に於ける自由である。他面は即ち超時的個人的にして其の目標はヘーゲルの意義に於ける絶對 (Das an und für sich seyende, das unendliche in sich vollendete oder beschlossene Sein——das Absolute) である。(1)

(1) 文化價值對創造價值の區別すべき三個の對立せる目標の内、文化價值を社會的、創造者價值を個人的なりとすることは非常に重要な意義に於て大なる制限を受くべきことは後段に述ぶる所を参照せられんことを切望す。

惟ふに社會の意義は文化に盡き、個人の意義は創造に終る。社會と個人とは同一價值の兩面に於て解釋せられたる二つの負擔者の謂ひである。兩者如何なる關係に立つべきやは同一價值の兩面に於て一は文化價值他は創造者價值と解せられて此の兩者が如何なる關係にあるやの解釋に倚屬すべきものである。余は今此の兩者の價值の關係を明にしようと思ふ。

文化價值の全部に互りて其の體系を形成せんと欲するは余にとりては寧ろ無益

の企てである。其のあり得べき種類を數へ上げ、或は之を分類して一を他の部類に抱擁せしむるに、人類歴史の發展と經驗の限りなき増大とに備ふる爲め、所謂 *das offene System* を樹立することも亦余にとつて無用の業である。余が上來屢々述べた理由の下に一文化價值が其自らの認識論的根據を得、其自らの認識目的を明にし得た場合には、其の文化價值は他の文化價值と並列して其の系列中の一ツの地位を得べきを以て足れりとする。之を必ずしも眞善美聖の四に限らざるべからざるの理由はない。況して此の如き *das offene System* によりて並列關係の中に在る一員を抽出して他のものゝ階段上の上位にあるものと解せしむるは、更に其の相互の關係を却つて闇晦ならしめこそすれ、諸文化價值の聯關倚屬的、乍併獨立的關係に對して正しき了解を齎らしむる所以ではない。余は文化價值の種類を限定せざるべからずとするの理由を發見し得ない。

唯諸文化價值の依つて以て存在し得べき基調、一文化價值より他の文化價值の分れて其自らの認識論的可能的根據を確かめ得べき根基、兼ねて此等諸文化價值の極限概念として其の目標たり、其の歸趣たるべき文化價值一般が可能なり得べきことは閑却してはならぬ。カント流の解釋に従へば是ぞ人類文化終極の歸趣としての

自由を意味するに外ならぬ。自由の完成とは即ち文化價值一般の内容的實現を意味する形而上學的觀念寧ろ信念である。

此の如き特殊の諸文化價值に對する文化價值一般のあり得べきことは吾等が若し諸文化價值の論義上成立可能の根據に想ひ到ることを得ば明であらう。即ち此の基礎の上に一文化價值は特定の内容を得て其自身完了の意味を語り得とする處に其の成立可能となると同時に其の文化價值によりて其の内面的意味を統一的に語り得ざるものあるに至つて他の文化價值の成立し得べき根據の存するを思ひ得るは唯其等が共通の基礎の上に於てのみ可能なることは明白である。此の基礎は即ち諸文化價值をして可能ならしむる認識論的根據なると同時に、他方諸文化價值の分れて存する最後の歸趣を示すものでなければならぬ。換言すれば諸文化價值は特殊の形式に於て表現せられたる文化價值一般である。文化價值一般は此の意義に於て諸文化價值の根據であり、歸趣であり、目標である。

創造者價值に至つても亦全く文化價值に於けると同一の理由を以て其の價值の種類を擧げ盡すの必要はない。文化價值に許すべき丈の數多き種類は又創造者價值に於ても之を認むべきである。天才的創造者は藝術にのみ限らない。哲學にの

み限らない。宗教にのみ限らない。些末なる技術にも、經濟にも、教育にも其自らの内面的意味を語るものとしては創造者を缺くものではない。カントが嘗つて哲學を以て天才の業に非ずと言ひたるは唯彼の主張する意味に於てのみ有意義である。カント自身の哲學を以て天才の業の好適例なりとなす後世の哲學史家は恐く十九世紀に於ける物理學、化學、數學、醫學、社會諸科學に互りて將又技術、經濟、軍事の諸制度に於て程度の差こそあれ天才的創造者を見出すに苦しむことはあるまい。余は個人的、統一的、自足的に其の内面的意味を發揚し得とする創造者價値を、又文化價値に於けると同様に眞善美、聖の四範圍として限定せざるべからざる必要と理由と根據とを發見し得ない。吾等が注意すべきは其の種別ではない、其の *Wortlautung* ではない、其の意味のみである。

文化價値の範圍内に於て文化價値一般を想定したる思想は創造者價値の範圍内に於て其の凡ゆる種類の價値をして可能ならしむる基調としての創造者價値一般又は單に創造者價値を想定する思想と相應せねばならぬ。全く *Symmetrie* の要求に應ずるの理由によつてではなく、各種の創造者價値を通じて其の凡ての根柢に横はり兼ねて此等を統一に導く所以の意味に於て一般的創造者價値を思はざるを得な

いであらう。

此の如き創造者價値の存する基礎の上に各種の諸文化價値に相應ずる範圍に於て亦各種の創造者價値が可能となるものであり兼ねて又こは各種の創造者價値の歸趣たり目標たり得るものである。兩者の關係は恰も文化價値一般と諸文化價値との關係の如く、一を *Gattungsbegriff* とすれば他は其の *Exemplar* として觀察し得べく、一を以て他の *das konkrete Universale* とするへ、ゲル流の解釋も亦此の點に於て許され得べきであらう。

此くして一方には文化價値一般及び各種の文化價値が想定せられ、他方には創造者價値一般及び各種の範圍に互りての特殊的創造者價値が想ひ設けられねばならぬ。而して此等は既に明かに述べた如く價値其ものゝ分別されたる種類ではない。同一價値の二の異なる方面の見方を意味するに過ぎない。従つて一方には文化價値他方には創造者價値の解釋を許さるべきものは其の根抵に於て同一價値でなければならぬ。此の如き文化價値一般及び創造者價値一般の二方面的解釋を許す價値を余は單純に價値又は價値其のまゝ (*Wert schlechthin*) と名づけて置こう。斯學慣用の概念を以てすれば絶對價値純粹價値 (*absoluter, reiner Wert*) と稱すべきであら

う。而して各種の範圍に互りての文化價值及び創造者價值例へば學問的、藝術的、宗教的、倫理的、法律的、經濟的等の文化價值及び創造者價值なる二方面の解釋を許す價值は、余は之を便宜上夫々此等を形容詞としたる價值例へば學問的、藝術的、宗教的、倫理的、法律的、經濟的等の價值と呼ぶを以て至當と思ふ。

即ち各種の而して凡ゆる價值は其の解釋に兩面を有す。一は其の實現の過程に於て歷史上發展的の意味を寓し、從つて歴史を以て其の實現の位置とするが爲に社會的であり且其の理想と實現との距離は常に乖離的なるを思はしむ。其の實現過程の目標となり歸趣となり究極となるものは即ち文化價值である。他は其の實現の過程に於て時の流を起え、歴史を以て其實現の直接係はるべき位置とせざるが故に、其の意味に於て自足完了的であり個人的である、且其の理想と現實との距離を端的に制服するの意味に於て統一的である。此の如き意味に於ての價值は即ち創造者價值である。重ねて曰ふ。文化價值と創造者價值とは同一價值の解釋の異なる二方面である。價值其のものゝ性質として一は進歩發展的他は自足完了的、一は社會的、他は個人的、一は乖離的、他は統一的なるのではない。凡ての思惟を排却すべしとは思惟すること能はず、凡てのものを疑ふべしとすることを疑ふ能はざると同

じく、發展的なりとするもの、基礎其自身は發展的なること能はず、乖離的なりとするもの自身は自ら乖離的なることを得ない。文化價值が創造者價值と相對して發展的、乖離的なりといふは價值自身の性質として發展的、乖離的なる能はざるは言ふまでもない。唯其の實現の過程に於て此の如き性質を其の特性とするが爲に此の如き解釋上の區別を擧ぐるに止まる。價值其自身として文化價值、創造者價值は共に其の係はるべき範圍内に於て圓滿具足統一絶對なる一個のイデオであり、一個の當爲であり、一個の規範たるに些の差違あるべき理由はない。價值は其の解釋の如何によつて價值其自身たるを失ふものではない。恰も學問的價值が價值其自身としては藝術的價值の價值たる所以と些の異なる所あらざるべきと全く同一である。假令學問的價值と藝術的價值とは異なる所あるにしても是亦畢竟內面的に同一なる價值の方面的解釋を異にするあるのみ。文化價值と創造者價值との關係も亦全く之と同じである。價值としては如何なる意味に於ても永久に價值である。

六

價值は其の實現過程に顧みて一は文化價值として社會的、發展的、乖離的であり、他

は創造者價值として個人的、自足完了的、統一的であることは今吾等が之を明にしたる所であるが、然らば此の二は其の價值實現に於て常に必ず相照應し、創造者價值のある所文化價值之に伴ひ、文化價值のある所必ず創造者價值ありと見るを得べきか、或は常に必ずしも相伴はず夫々獨立の意義を夫々特殊の位置に於て發揚するを常とすべきか、若しくは兩者全く相伴ふこと能はざるを以て其の本然の性質より來るべき歸結なりとすべきか。此解釋の如何は又延いて近世特に十八世紀以來益客觀的獨立の意義を發揮し來りたる「社會」に對する個人の關係を究むるの根據如何に對して一の深き意味を示す所以であると思ふ。個人主義は飽くまで個人の尊嚴を維持し之を發揚するに於て社會は第二次的たるべしと主張するであらう。社會連帶論者は又之に反して終には之を徹底的に論ずれば恐く全く個人を社會の中に吸收し終らざれば止まぬであらう。二十世紀に於ける吾等は最早此の間の矛盾を去り調和を立つるに於て *Fetichism*, *Spinoza* を享けて *Leibniz* が稱へたる如き論構を以てする *Harmonie préétablie* を以て満足すべくもなし。又個人の利益は知らず識らず社會の其に合致すべしとする *A. Smith* の説(1)を受けて *Rastin* が經濟生活に關して稱道したる如き *Harmonies* も吾等の理論的要求を充たすべくもなし。余は茲に社會對個人

の問題につきて其の解釋を追べき例證の一々につきて、如何に此の問題が現時社會的文化哲學の研鑽に従事するものゝ頭腦を支配すべき理由あるやを指示するは、餘りに事明白にして無益なりと信ずる。各般の社會的問題にして其の究極に於ける解釋の分るゝは、皆一に此の社會對個人を如何に見るやの異なるによつて然るものである。余は余の上來記述したる文化價値の理論によりて、社會對個人の關係は解明され得べきもの而して又されざるべからずと主張せんと欲するものである。

5. "Every individual is continually exerting himself to find out the most advantageous employment for whatever capital he can command. It is his own advantage, indeed, and not that of the society, which he has in view. But the study of his own advantage naturally, or rather necessarily leads him to prefer that employment which is most advantageous to the society." (A. Smith: *Wealth of Nations* vol. II. London, 1776, p. 32.)

價値其自身として其の性質の差異を惟ふことが誤まりなりとすれば、其の實現に顧みて解釋の方面を二に分たれたるものとしての文化價値と創造者價値は社會對個人の問題に關聯して兩者相互の關係を如何に見るべきや。今例示によりて此の間の關係を明にして見たいと思ふ。

茲に一藝術的天才あり。深く自ら信ずる所に従つて從來の傳統を破り且之に反抗し其自身固有の内面的意義を發揮すべき一個の作品を世に出したりとする。恐くは同じく藝術的生活に従ふものゝ間にあつても之を了解することなく政治生活、法律生活、道義生活、宗教生活に従ふものゝ裡にあつては嘗て之を了解し之に同情する能はざるのみならず、恐くは之に壓迫を加へ之が滅絶を期せんとする如き又は此の如きことを期したることは古來歴史の上に決して類例に乏しかつたことではない。學問的天才の場合に於ても、社會改良家の場合に於ても、亦其の他の範圍に於ける天才の場合に於ても、同様の事例は擧げて數ふべからざるものがある。古へも然り、今も然り、將來も亦恐く然らざるを得ないであらう。此の場合には創造者價值と文化價值との上來の解釋に照して果して何を意味するであらうか。

此の場合に於ては言ふまでもなく一新創造者價值か實現せられたるときは、此の特定の範圍に於て既に實現せられたる文化價值と此の新創造者價值との間に相互に了解を欠くほど大なる距離あることを示すものなると同時に、他の範圍に於ける文化價值實現の過程に對しては、此の如き新創造者價值の實現は此に止らず、進むでは恰も其の固有の價值實現過程を妨げらるゝの感あらしむることを示すものであ

る。或る特定の文化價値の實現せられたる階段に於ては其の具體化せられたる文化價値は一個の共同財 (Femeingut) と稱すべきであらう。創造者價値は其の範圍に於ける共同財との間に於ける距離が餘りに大なること上の例の場合の如きに於ては、其の共同財の側より見れば全然之に對する了解を欠くものであり、他の範圍に於ける共同財の側よりは猶其以上に殆ど背反、對峙の關係にある如き思ひを抱かしむる状態に至ることあり得べきである。而して此の如き場合は多くの天才的創造者が嘗めたる悲慘の歴史の勢からざる類例を示すものと云ふことが出来る。之に反して一創造者價値が實現せられたる場合に於て單に驚嘆すべき一個の傑作なりとして享け容れられたる場合に於ては、其の範圍に於ける共同財との距離は打勝たれ得べきものなることを示し、而して他の範圍に於ける共同財とは相協調を保ち得べき關係にあることを示すが故に、新に實現せられたる此の特定の創造者價値は其の傑作、新發見、新發明として享け容れらるゝ瞬間に於て、直に其の範圍に於ける文化生活に於て共同財として觀察せられ得るが故に、此の場合に於ては文化價値實現の過程に於て何等の支障なく其の一步を進め得たるものと云ふことが出来るであらう。此の如くして一步は一步に近づきて且全範圍に互りて其の實現の歩武を進め、此く

して文化生活の理想として歴史の終極目的たる文化價值一般の内容的實現をすら思はしむる如き形而上學的信念を喚び起すに至るであらう。此の如き場合に於ては創造者價値の實現は即ち其の反面に於て文化價値實現の過程其自らと何等の異論なく觀察せられ得るものである。之に反して前に例として擧げたる場合に於ては反對に創造者價値が豫言者郷黨に容れられざるの趣きを傳へて孤影孑然同情すべき多くの天才超人が經驗したる苦惱の傷ましさを吾人の面前に展開したるものである。而して此の如き運命の下に弄ばるゝ創造者は決して稀なりとは言ひ得まい。一天才によつて爲されたる努力が數百年の歲月を経て始めて後代に知己を得るの例も亦決して尠くはない。創造者價値と文化價値との並行は必ずしも常に望み得る所でもなく又況んや常に見得る所でもない。否、新創造者價値が共同財の標準を去ること遠く、其の距離の大なること甚しきものに至つては創造者價値と文化價値とは相伴はざるを以て寧ろ常態なりとなすこと決して不當なりとは云ひ得ない。是悲しむべきではあるが而も事實なるは否むべくもない。此の如くして更に之を徹底的に論ずれば恐くは歴史上永久に文化價値と相遭ふことなくして埋没せられたる創造者價値も決して少くはなかつたらうと想像することも亦不可能では

ない。幾多の天才が轆轤不遇の裡に其の夢の如き一生を終へた涙の歴史は程度の差こそあれ皆共に此の間の消息を明瞭に傳ふるものである。

此の如くして文化價值と創造者價值とは實際歴史生活の上に於ては兩者相照應し且相伴ふの場合も數の上に於ては次して尠いとは云へまいけれども、特に吾等の注意を惹く意義に於てすれば、兩者相伴はずして或は其の儘に其の意義を永久に失ひたるべしと想像し得る場合、或は假令此の如からずとするも其の兩者の距離の制服に幾多の歲月、幾多悲惨の犠牲を要求したる類例も亦次して尠くはない。前者の場合に於ては別段に吾等の問題とはならない。所謂社會と個人との協調は茲に保たれ之によつて凡ゆる種類の社會對個人の借調説は稱道せられ得べきである。之に反して吾等に問題たるは後者の場合である。創造者價值は儼として其自身に固有の内面的意義を語るものでありながら、文化價值實現の過程に入り得るまでは——幾多の歲月、幾多の曲折が其の間に横はることであらう——諺に獨自完了の意味の内に自ら満足するに止まらねばならぬ。而して更に進むでは此の獨自完了の意味の裡に満足するに止まること未來永恒に互らねばならぬこともあり得べきである。茲に創造者價值の悲哀があり而して又他面其の尊嚴がある。

余嘗つて太平洋を航行して月明の麗かなるに終夜の歡を貪つたことがあるが、鳥も見ゆるなく鳥さへ飛ばざる太平洋の唯真中に、吾等が航行する船ありたればこそ其の浪の上に輝く月の光をこそ見たれ、若し船の其處に航することなくば月は見らるる人もなく、況んや自ら求むるなく怨むなく終夜其の光を放げつゝあつたであらう。余は幾年後の今日猶ほ此の想ひを忘れ能はぬ。今創造者價値を思ひ而して文化價値實現の過程に没入するに至るまでは又は永久に没入することなくして、其自身の内面的意義を語るに止まるべきものあるを想ふて端なく當時の余の感想を茲に再び喚び起さざる得ない。余は無心ながら月の敢て求むるなき偉大と尊敬とに對して轉た畏敬の感に打たれたが、創造者價値に對しても亦圓滿具足完了の意味の裡に自らを統一して他に求むるなきの偉大と尊敬とを思はざるを得ない。社會を放れて個人の尊嚴人格の *Wunder* は究極の根據を茲處に据えつゝあるものであらう。

乍併文化價値と創造者價値とは永久に相會はざるべきことあるも亦其の本然の性質より然らしめらるべきことなるが。此の問題は更に沈思を要求すべきものである。偶々歴史の上に於て此の如き類例に乏しからざるべしと類推せしむる者あるは、此の兩者の價値の性質より必然論理的に導き出さるべき結果なりと考ふべきか。

惟ふに創造者價値の實現に従ふ天才は畢竟一個の人として歴史の浪の中に搖らるゝものと解釋し得る一面ある以上、其の實現せらるゝ創造者價値の内面的意味が假令歴史を離れ發展を脱して猶且其自身固有の立場あり得としても之を文化價値と交渉せしめて觀察し得べき一面の存在せざるべからざること蓋し否み得ない。従つて此の意義よりすれば永久に相背反し相接觸せず文化價値と何等の交渉に立たざる創造者價値を考ふことは論理上に於ては不可能と云はねばなるまい。況んや創造者價値と文化價値とは價値の分別されたる種類に非ずして、同一價値の二ツの異なる方面の解釋に過ぎずと解するに於てをやである。而かも他方には創造者價値の實現が文化價値實現の過程に於ける共同財に對して何等の了解を得ること能はず又は背反對峙の關係に立ち而して永久に兩者の合致を見ることなくして終ることあり得べしと考ふことも強ち無稽には非ずと云ひ得る。此の如く一方には兩者合致の論理的要求を思はざるべからざるの一面あると同時に、他方に兩者背反の實際的事例を擧げ得る他面あることは否み得ない。此の *Dilemma* は如何に解くべきか。

一創造者價値が文化價値實現の過程に没入すること永久に之なくして而かも其

自身固有の内面的自足完了の意義を有し得べしとするの根據は、此の場合に於ては其の反面の解釋たる文化價值に係はらしめられて然るものに非ざるは云ふまでもない。何となれば文化價值と永久に合致せざる場合に於て一創造者價值の内面的意義を定むるに猶ほ文價價值に係はらしめんとするは、恰も有なる概念に係はらして其の反對なるものとして初めて意味ありとせらるゝ非有、無を抽象的に有に係はらしめずして具體的概念として思惟すべしと云ふの、吾等の場合とは全然反對の立言が論理上不可能なると全く其の揆を一にして居る。創造者價值が永久文化價值と相遭ふことなくして猶能く其自身自足完了の意義を有し得べきや否やの標準は、唯一に其の創造者價值の依つて以て係はるべき其々の内在的價值(例へば自然科学に對しては普遍化概念構成上の價值)に照して可能、不可能が判斷せらるべきである。此の如くして一旦其々の範圍内に於ける其々の認識目的に係はりての價值に照して其の可能が基礎づけられたる一創造者價值が成立し得たりとして、而かも此の如き孤立的創造者價值が唯、内面的自足完了の意義を獨自に語るに止まるものとしたる場合には、其の反面の解釋たる文化價值に對する關係は抑、如何なるべき。

余は此の場合文化價值と創造者價值とが合致すべき論理的要求の必然なる方面

と、兩者永久に合致せざるることあるべき實際的歴史上の事例が可能なるべき方面とに顧みて此の兩者の關係を二に區別して考ふる必要ありと考へる。即ち前に曰ふた通り兩者合致の論理的要求として示さるゝ如く、此の如き永久に相會はざるべき孤立的創造者價值も亦何等かの意義に於て文化價值の反面的解釋として見られ得る考察なからざるべからずとする方面と、之と反對に兩者が永久に合致せざることあるべきを思はしむる實際的事例に合する如く一孤立的創造者價值が如何なる意味に於ても文化價值と永久に交渉に立たざるものなるかの感を抱かしむる方面とである。前者の場合に於ては天才と維も亦人類の一員として歴史の波に揺らるゝ以上、其の外部に發表し若しくは發表せざる價值實現が假令時の上に於て過去現在未來の永久を貫き、處の上に於て東西に互り何人によつても了解せらるゝとなしとしても、猶且文化價值の實現と解釋せられ得べき一面を要求するの根據ありとすれば、并は其の創造者價值の實現者たる天才も亦等しく文化價值實現の過程の裡に其自身固有の位置を見出し得べき一員なることによつてのみである。之に反して兩者永久に相合致せざるべきことあるを思はしむるは、文化價值實現の過程にある一定の社會の範域以外に此の創造者を排却して考ふる場合でなければならぬ。即ち

文化價值を考ふる場合に其の性質の社會的なりと云ふことを強調するが爲めに、其の孤立せる創造者價值を解して唯、個人的なりとして之を享け容れざる場合である。即ち前者の兩者合致の論理的要求を充たさしむべく考へらるゝ文化價值は孤立の創造者一人によつても實現せられ得ることを思ふものであり、即ち此の意義に於ては文化價值は社會的ならず個人的なることを得るものなりと解釋せらるゝものであり、後者の場合は之に反して兩者が永久無關係なるべき實際的事例に適はんと欲するものであり、文化價值を解して何人も了解し得ざる孤立の創造者價值を其の内に含ましめず、即ち文化價值は如何なる意義に於ても社會的なるべしと思ふに在る。前者は一人の天才によつて實現せらるゝ文化價值を思ひ得べしとし、後者は何等かの意義に於てか一人以上の社會によつてのみ實現せらるゝ文化價值を思ふものである。前者は文化價值を以て其の實現過程に顧みて發展的、理想現實に於て常に乖離的なるを思ふも而かも凡て人類の努力は初めは何等かの意味に於て程度上の差こそあれ孤立的創造者の努力を以て其の端を發し、他の人類は遲速、難易の別は兎も角之に隨從するによつて共同財を成立せしめ得るものなりと見れば、多くの場合に於て文化價值は社會的なりと解すべしとしても、又尠からざる場合に於ては假令之

に追隨する社會の理解はなくとも一の孤立的創造者價值によりて猶能く文化價值は實現せらるゝものなりと解し得るが故に、此の意味に於て文化價值は個人的なり得と解釋せんと欲するものである。之に反して後者は文化價值を以て發展的、乖離的且嚴正に社會的なるべしと解釋するものである。

余を以て之を見れば前者の論理的要求を充たすべく考へらるゝ文化價值對創造者價值の解釋を以て當れりと云はねばならぬと思ふ。即ち文化價值の實現は歴史を舞臺とするに於ては發展的、乖離的なるに加へて社會的なることを以て常態とするけれども、一孤立的創造者價值と雖も其々其の内在的價值に照して可能なるの根據確固たるに於ては、是亦其の範圍に於ける文化價值の實現なりと見ねばならぬと思ふ。是理論上の要求に従ふものなるのみならず又兼ねて歴史の上に於ける多くの學問上、美術上、宗教上、社會改良乃至革命上の天才の偉業の如き皆當さに此の如き解釋を迫るものである。之に反して吾々人類の全部によつて全く諒解を得能はざりし幾多の天才が受け忍んだ慘憺たる歴史は此の一人の天才を抱擁する能はざる社會内に妥當なる文化價值と背反對峙の關係にあることを示すと云ふによりて説明し得る事象である。其の天才を抱擁せざる社會によつて此の如き一孤立的創造

者價值が猶文化價值の實現なりと觀察せられ得るまでには幾多の犠牲と幾多の歲月とを要することも亦歴史の上に吾等が屢見る例である。而かも此の如き歴史上の偶然性によりて創造者價值の其自身の内面的自足完了的意義と價值とは左右せらるべくもなく、亦之か人類の一員として文化の窮極に於て目標として立てる文化價值の實現に係はらしめて觀察せられ得ぬとは思はれない。即ち此の如き全く孤立的なる創造者價值も亦文化價值の解釋を容るゝ一面あることを否むといふは論理が許さぬ。此の點に於て文化價值と創造者價值とは合致すべきものと云はねばならぬ。是他面に於て余が上來主張したる如く創造者價值と文化價值とは價值の二つの異りたる種別には非ずして同一價值の二面的解釋なりとするの當れることを證するものと云ふことが出來よう。乍併此の合致は文化價值本來の意義に於て論理的に基礎づけせられ得べきこと云ふまでもないが、實際の歴史に於ては前述べた如く此の如き孤立的創造者が自己に對峙する社會に對して直ちに其創造者價值の容認を要求し得る場合もあり、其の間多少の歲月、多少の犠牲、多少の努力を要する場合もあり、亦全く其容認を得る能はざることも決してないことはない。最後の場合には或は其の容認を得る手段を缺けることもあらう、到底其の了解を得能はざるこ

ともあらう、創造者自ら其の容認を要求せざる態度に出づることもあらう。何れにしても此の最後の場合の類例は決して尠くはあるまい。況んや一創造者價値が永き歲月の間、多くの犠牲を供する間、端的に自己を除外したる社會によりて一文化價値の反面的解釋としての意味を明にし得ざる歴史上の事實は甚だ多い。否、恐くは程度上の差こそあれ傳統に反して學問上、藝術上、倫理上、宗教上、教育上、習慣上、政治上、經濟上、技術上何等かの意義に於て改良乃至革命に志すものは、假令其の内面的價値が夫々の價値に係はりて可能なることが確かなりとしても、皆此の悲惨なる運命の下に泣かねばならぬ。人類文化の悲劇は茲に在る。唯、其の創造者自身を包含する人類全部に係はるべき文化の舞臺が歴史であり社會であるの意味に於て文化價値は猶ほ歴史的、發展的、乖離的而して社會的なりと云ふことが出來よう。(2) 而して此の如き文化價値の必ず他面的解釋として創造者價値を思ひ得る處に創造者價値の慰めはある。此の意味に於て天才は孤立しない、必ず其の隨伴者を有する。

(2) 前段第五章註(1)参照

此の意義に於て創造者價値と文化價値との關係は解釋せらるべき者である。繰返して曰へば文化價値と創造者價値とは其の根本の論理的性質に於ては必ず相照

應し相伴ふ者であつて、文化價值のある處必ず創造者價值あり、創造者價值のある處必ず文化價值あるべしと雖も、而かも之によつて各其の獨自の内面的意義を語ることを妨げらるゝものに非ず、相照應し相伴ふの論理上の根據は互に有する獨自の意味を破毀するものではない。翻つて他方實際歴史上の事例に於ては程度の差こそあれ其の考察に入り來る創造者を除きての社會を對象として考ふれば此の範圍に於ける文化價值と創造者價值とは常に必ずしも相伴はず相照應せず、創造者價值が何等かの意義に於ける一時的か又は永久的に孤獨の悲哀を経験せざるべからざることも亦兩者の論理的本然の性質より必然導かるべき歸結なりと云はねばならぬ。孤獨なる創造者をも抱擁する文化本然の意義よりすれば、文化價值と創造者價值とは相照應し、相伴ひ、相合致すべきものである、二の并行線の接觸は茲處に在る。之に反して此の如き創造者を包容せざる社會を對象として考ふれば、此の第二義的文化價值と創造者價值とは必ずしも相伴はず相合致せざること、二の并行線が永久接することなきに等しい。後者の場合の文化價值は第二義的ではあるが永久に之と照應せらるゝことなかるべき創造者價值を考ふる場合に於ては、其の實際の重要に於て殆んど第一義の文化價值とも稱せらるべきものである。何となれば此の如き創

造者價值が夫々内在的價值に係はりて可能なることが確立せられても、其の創造者以外何人によつても認識の範域内に持ち來されざる以上又持ち來し能はざる以上、其の價值の可能を立證し其の内面的自足完了の意味を語るべき經驗の何物をも得能はぬからである。而して此の如き事例は決して少からざるべきが故に、實際歴史の上に於ては假令文化價值と創造者價值とは何等の困難なく合致の可能を思ひ得ることもあるべしと雖も、又之と同時に兩者を以て全然合致せざるもの、照應せざるもの、相伴はざるものなりとすること普通なりとせしむるに至るものである。即ち兩者の合致なるものは其の創造者を含む意義に於て論理的に可能であり、之を排除する意義に於ては可能なる場合もあれど亦不可能なる場合もあり得べきである。論理上必然の合致を思ひ得べきは唯、前者の意義に於てのみである。乍併此の意義に於て創造者價值と文化價值との二の平行線が其の延長に於て必ず合すべしとするは Kant が *Gründerlichkeit* と *Tugend, Legalität* と *Moralität* との無限の延長に於ける必然的合致を思ふものとは其の意味を異にする。Kant の場合に於ては寧ろ信念に其の根據がある。余が文化價值と創造者價值との即時又は多少の時の經過若しくは無限の延長に於て必然的の合致を思ふとするは、其の根據信念の界にあるのではなく

して其處に認識論的の根據がある。畢竟文化價值と創造者價值とは二の異なる價值の分別されたる種類ではなくして、同一價值の二面的解釋であると云ふことは是である。一面の解釋を許す價值が他面の解釋に全く *inrelativit* なりとすることは論理が許さぬ。一面を有するものは必ず他の一面を有すべきである。而して此の一面と他の一面とは同一價值の兩面なるの故を以て創造者價值と文化價值とは其の根抵に於て同一價值を意味せねばならぬ。即ち兩者必然相伴はねばならず、相照應せねばならず、相合致せねばならぬ。

natura non facit saltum とは近世科學が其の劈頭に掲げたる *notio* であつた。余は此の語を學んで天才は飛躍せずと云はう。飛躍すると見、甚だしきは狂者に近しとするは、之に伴ふ能はざる文化價值實現過程の中に蠢々たる凡人の眼に於て然るのみである。乍併終極の意義に於て創造者價值と文化價值とが合致すべき認識論的根據ありと主張する吾等には、吾等凡人と雖も亦文化の解釋に於ては等しく文化價值に係はらしめざるべからざるの意義に於て天才の途を辿るに原則的不可能はあり能はぬ。追隨の可能なるが故に哲學を以て天才の業に非ずとするならば、人文發展の記録たる藝術、宗教と雖も亦天才の業に非ずと云はねば論理が立たぬ。否、創造者

價値は人文所産の凡ゆる範圍に互りて可能であり、而して吾等凡才は文化價値實現の過程と其の意義とを通じて創造者價値の内面的意味を體驗することが出来る。少くとも其の不可能を主張し得べき如き原則は余には考へ能はぬ。唯、其の之を體驗し得るに至るまでの創造者價値と第二義的文化價値との間に横はる所謂乖離の存するあるは當さに文化史上の悲劇と云はねばならぬ、而して其の悲劇の餘りに多きの傷ましさは、やがて個人對社會の原則的背反をすら思はしむる所以である。

創造者價値の尊嚴に於て個人の意義は盡き、文化價値の完成に於て社會の意味は全し。個人と社會との合致、調和は唯此の終極に於てのみ、此の究竟に於てのみ論理的根據がある。之に反して其の中道に於ては既に見たる如く兩者相伴はざることも決して稀なりとはせぬ。のみならず個人が其の係はる範圍以内及以外の社會例へば學者に對する其の社會并に經濟、軍事、宗教の社會の如しとの交渉に於て全く之と相容れざるの關係にあつて止まることも亦甚だ稀ではない。個々の行爲につき常に個人と社會とが其の意味、利害を共にし能はざるのみならず、其の特定の個人が全部の意義に於て社會と偕調を保つ能はざることも有り得べきである。殊に吾等を刺激するの強さに於ては創造者價値と文化價値、新創造者價値の實現と共同財個

人と社會との乖離を思はしむるものは寧ろ其の感情の上に於ては其の類例却つて其の偕調を保つ場合よりも多しとせしむるものがある。徒らに個人と社會との調和を云爲するものは強ひて此の關係を無視せんと欲するものに過ぎない。此の故に個人と社會との調和を思ひ得る所以は唯だ一に創造者價值と文化價值との究極的合一點が同一價值、當爲、規範、イデーであつて、吾等の凡ゆる行藏の目標たり歸趣たるに於てのみ可能なるの論理的根據があるばかりである。個人と社會との意味、個人と社會との關係は畢竟此の根據を外にしては何等の解釋を見出し得べからざるものである。

余は此の如くして創造者價值及び文化價值の各々の性質及び其の兩者の關係兼ねて其の兩面的解釋を可能ならしむる根基としての價值及び總じて價值の體系を明にするによりてのみ社會對個人の意義を闡明し且之に關聯する各般の問題に對して其の的確なる論理的根據を與へ得べきものと信ずる。此の意味に於て價值の體系を定むるは兼ねて文化哲學の依つて以て立ち得る論理的根基を明にする所以である。而して本論は其の試みの小さき最初のものたるに過ぎぬ。(終) (八一〇、二八)